メモ

とみぐすく市の
文化財巡り

『沖縄の名木百選』に選ばれた
嘉数公民館のガジュマル

とみぐすく市の文化財巡り
発行：平成24年3月
豊見城市教育委員会
〒901-0232
豊見城市字伊良波 392
電話 /098-856-3671

豊見城市教育委員会

はじめに

「とみぐすく市の文化財巡り」は、豊見城市内に所在する文化財の概要をまとめ、紹介するものです。

近年、市民の文化財に対する関心が高まってきている一方、豊見城市の都市化に伴うさまざまな開発行為によって、わたしたちの貴重な文化遺産が次々と失われつつあります。開発と保護、これらは人々が生活していくなかで長年のテーマとなっております。このような状況の下で、「とみぐすく市の文化財巡り」が多くの方々の学習資料や生涯学習としての文化財探求の道しるべとして活用されることを希望します。

本書がガイドマップとして市民の皆さんに広く活用され、文化財をもっと身近なものに感じ、市内に点在する文化財を訪ねることにより、地域を見直し、文化財の保護や重要性を理解していただく手助けとなれば幸いです。

豊見城市教育委員会

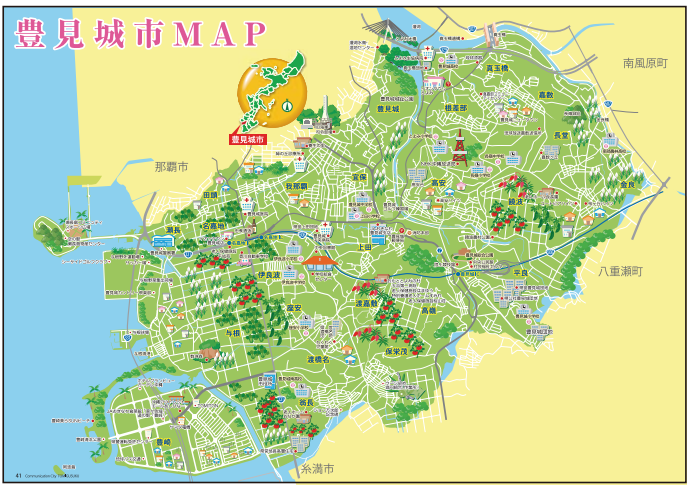
豊見城市の位置と環境

豊見城市は、沖縄本島の南西部に位置し、北側は県庁所在地である那覇市と隣接し、東側は南風原町、八重瀬町、南は糸満市と隣接する。

豊崎地区の埋め立て事業による企業や観光関連産業の誘致推進、宜保地区の都市開発による人口や企業数の増加等で本市は著しく成長し、平成 14 年 4 月 1 日には地方自治法施行後初となる「村」から「市」へと市制施行を行い「豊見城市」が誕生した。

地形的には東シナ海側の平野部とそれを取り囲む丘陵に分けることができ、畑、原野、山林、宅地などが広がっている。内陸部には東から西側にかけて饒波川が流れ、それと平行して那覇市との境界を国場川が流れ、県内でも有数の野鳥の飛来地漫湖で合流する。

地質は主に泥灰岩土壌（でいかいがんどじょう）（シルト岩）で字我那覇、字名嘉地、字田頭、字瀬長の一部に分布し、沖積土（ちゅうせきど）は字平良、字高嶺の東半部に琉球石灰岩（りゅうきゅうせっかいがん）と島尻マージ（赤土）が分布する。その土壌は肥沃（ひよく）で、農業の盛んな地域で戦前はサトウキビ、戦後は葉野菜の生産を中心に行われている。近年ではこれらに加えビニールハウス栽培などを中心にした都市近郊型農業が盛んに行われ、マンゴー、トマト等が栽培されている。



豊見城市の位置図

豊見城市内の文化財巡り

①豊見城グスク

豊見城グスクは豊見城集落の北東側、標高 54 mの漫湖を眺望できる丘陵上に立地しています。グスクに関する伝承や記録は乏しいのですが、14 世紀末～15 世紀初頭に汪応祖が築城し、尚巴志によって落城したといわれています。1719 年には冊封使として訪れた徐葆光が荒れはてたグスクの様子をその著に残し、1853 年にはペリー艦隊一行も訪れ、城内より見た風景を絵に残しています。グスクの遺構は戦前の写真資料等から城壁やアーチ門等が確認できますが、先の大戦等により破壊され、現在は北側に城壁と思われる一部が確認されるのみです。

(※平成 24 年 3 月現在、休園中のため域内入場不可)

②豊見瀬御嶽

豊見城グスク内にある御嶽で『琉球国由来記』(1713 年) に「城内豊見瀬御嶽　コハナリノ御イベ」と記されています。旧暦 5 月 4 日の爬龍船競漕や雨乞いには那覇や久米村の役人達も参拝したことが記されています。1972 年に改修整備されました。

豊見城グスク

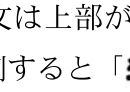
豊見瀬御嶽

③ハーリー発祥の地「漫湖」

ハーリーの由来には諸説ありますが、琉球王国時代の歴史書『球陽』（1745 年）の一説によると豊見城城主の汪応祖が中国に留学した時に龍舟を川に浮かべて競漕するのをみて感動し、帰国後、中国の製法に習って龍舟を造り、５月のはじめに城下の漫湖に浮かべて遊覧しました。それを見て那覇周辺の人々は龍舟を造り、旧暦５月４日に豊見城城下に来て競漕し、お目にかけるようになったのがハーリーのはじまりともいわれています。

漫湖を東側より望む

④梵字碑

方言でニービヌフニと呼ばれる細粒砂岩性の碑で、梵字（古代インドのサンスクリット語を書き表す文字）が彫られています。碑文は上部が失われていますが、残存する部分から推測すると「  」と思われ、これは宇宙を形成する「地、水、火、風、空（空間）」を意味し、密教で宇宙の中心の仏とされる大日如来を表しています。この碑が建立された時期や由来などは不明ですが、おそらく魔除けの意味を持つものと考えられます。

梵字碑

⑤石火矢橋（イシバーシ）

石火矢橋は豊見城グスクの南東側、饒波（のは）川下流に架けられた橋のことをいいます。当初は「真玉橋」同様木橋で、真珠道（まだまみち）として利用されていました。1694年に洪水によって損壊し、1697年に石橋に改修されました。先の大戦で一部破壊され橋脚部（きょうきゃくぶ）は近年まで残っていましたが、現在の橋の改修により取り壊されました。

現在の石火矢橋

⑥重修石火矢橋碑文（じゅうしゅういしばーしひもん）

重修石火矢橋碑文は、木橋であった石火矢橋が1694年に洪水によって損壊した後の1697年に石橋に改修したことを記念して建立された碑文です。表面には石火矢橋が改修された経緯が記され、裏面には工事に費やした人夫、工銭（費用）等が記されています。碑文は先の大戦でほとんどが破壊されましたが、台座部分は残存しています。

重修石火矢橋碑文台座

⑦真玉橋（まだんばし）

真玉橋は、1522 年に那覇市首里の守礼門付近～那覇港南岸垣花（かきのはな）の屋良座森（ヤラザイムイ）グスクまでの主要な軍用道路である「真珠道」のために架けられた橋です。当初は木造の五連橋で中央を真玉橋といい、南側が世持橋（よもちばし）、北側が世寄橋（よよせばし）、両端は無名の橋でした。1707 年石橋への改修工事が開始され翌年に完成しました。その後、1836 年に世寄橋を改築し、その北側へ新たに世済橋（せいさいばし）を築き工事は翌年終了したといわれています。真玉橋は大きく美しい曲線の六つのアーチを連ね、水流から橋を守るために潮切りを設けるなど構造的にも沖縄独特の石造文化を代表する橋でした。しかし、先の大戦で破壊され戦後は鉄橋やコンクリートの橋が架けられました。1996 年の改築工事に伴う発掘調査でその一部が出土しました。その後、現在地に一部を移築し、豊見城市有形文化財に指定されています。

戦前の真玉橋（田辺泰著『琉球建築』より）

移設後の真玉橋

⑧ 重修真玉橋碑文

重修真玉橋碑文は、1707年と1836年に行われた「真玉橋」の改修工事のことを記した記念碑です。表面には工事に至った経緯が記され、裏面には石大工数や人夫数等が記されています。

「真玉橋」同様に先の大戦で破壊されましたが、その残存資料は豊見城市有形文化財に指定され、現在は豊見城市歴史民俗資料展示室に展示されています。また、1980年に真玉橋自治会によって真玉橋公民館前に復元されています。

⑨ガンヤー・コーヤー

葬式の際に遺体を墓まで運ぶ輿をガンあるいはコーといい、それを保管する建物をガンヤーまたはコーヤー等といいます。市内においては高安、饒波、保栄茂に現存します。旧暦の8月9日には祭礼が行われ、特に高安では辰年にはジューサンニンマール（十三年廻り）といってガンをガンヤーから取り出して補修点検を行います。当日はガンを担いで字内を行列するほか、祭事の後にアシビと称して様々な余興を行い、字を挙げて盛大な行事を行います。

A 高　安

B 饒　波

C 保栄茂

高安 のガンゴー祭

⑩ビジュル・ビジュン

石に神性を認め、ビジュルあるいはビジュンと称して崇拝する霊石信仰は県下各地に確認でき、市内では高安、饒波、宜保、渡嘉敷に見られます。高安では毎年旧暦 9 月 13 日の「ビジュンヘーシ」には字民各自参拝して無病息災や家内安全を祈願し、あわせて出産や家屋の新築などを報告する習わしになっています。

高安のビジュン

⑪長嶺（ながみね）グスク

南部農林高校の北西側、標高 98 mの丘陵上に立地しています。石垣等の遺構は確認されていませんが、中国産の青磁片（せいじへん）、タイ産半練土器（はんねらどき）、褐釉陶器（かつゆうとうき）などが採集されています。グスク内にはナガンミヌトゥン、アジウハカ、クガニガー等の拝所や井泉（カー）が点在します。グスクに接して南にビジュルウタキがあり、さらにその南麓（なんらく）には長堂や金良の門中墓（ムンチュウバカ）が分布しています。

長嶺グスク

⑫トゥドゥルチガー

『琉球国旧記』（1731 年）に「平良泉（平良轟）」と記されており、当時から貴重な生活用水として利用されていたものと思われます。

以前は水量も豊富で簡易水道が引かれて利用されていました。現在は「せせらぎ公園」として整備されています。

⑬平良（たいら）グスク

平良集落の西から北にかけての背後にあり、その多くは丘陵地帯になっています。標高 109 mで市内最標高地点です。

グスクの西側は絶壁ですが、東側に生い茂った木立に城壁がみられます。城壁はそのほとんどが野面（のづら）積（っ）みで、東側から南側にかけて岩と岩との間隙（かんげき）にみられます。

組踊「未生（みしょう）の縁（えん）」ゆかりの地としても知られています。

⑭保栄茂グスク

保栄茂集落北東側にあり、別名「ウグゥンヤマ」ともいわれます。グスクの最頂部をウィグスク、その北側にある平地をシチャグスクあるいはトゥヌ（保栄茂の殿）といいます。トゥヌの試掘調査等では住居跡と思われる柱穴が確認されています。その他、14 世紀頃の中国製陶磁器等も出土しており、直接的、間接的な交流があったことがうかがわれます。平良グスク同様、組踊「未生の縁」ゆかりの地として知られています。

⑮ジョン万次郎と豊見城

ジョン万次郎（中浜万次郎）は 1827 年に土佐藩中ノ浜（現在の高知県土佐清水市）の漁師の子として生まれました。1841 年仲間 4 人と共に出漁中に遭難し、無人島である鳥島に漂着した後、アメリカの捕鯨船に救出されました。その後、万次郎のみが渡米し、航海術、測量、造船技術を学び、捕鯨船の乗員になり世界各地を廻りました。1851 年に望郷の念にかられ日本への帰国を決意し、2 人の仲間と摩文仁間切小渡（現糸満市大度）に上陸しました。万次郎らは取り調べのために那覇へと護送されますが、那覇へ入る直前に王府の命令により豊見城間切翁長村（現豊見城市翁長）まで戻されました。約半年の間、村人の監視はありましたが、好奇心旺盛な万次郎はたびたび外出して村の青年達と接し、祭りなどにも参加したといわれています。

⑯珠数森（ジジムイ）

17 世紀中期の「琉球国絵図」には「つゝ鶴」と記されています。『琉球国由来記』（1713 年）には大干ばつになると王府役人達が那覇の上天妃宮（かみてんびぐう）にあった龍王を豊見城城内に安置して龍王に酒や花米、水を供え降雨を祈願しました。その翌日から間切内の各御嶽で雨乞いを行い、最終日には「珠数大アスメ」で間切中の神女や役人達が揃って雨乞いをしたと記されています。この時、鍋で海水を汲み、これを大アスメにかけた後、この鍋を保栄茂のノロが頭にのせ７回廻ったといわれています。

豊崎より望む

⑰瀬長島（瀬長グスク）（せながじま）

瀬長島は「アンジナ」あるいは「アンジナー」ともいわれます。これは古くから島内に按司（あじ）の居城があったことから「按司の住む砂地の島」という意味の「アンジナジマ」から転訛（てんか）したものとされています。先の大戦や戦後、米軍基地として使用されたことにより大きく地形が変貌し、グスクの面影は見られません。しかし、グスクの範囲確認調査を行ったところ、当時の生活跡が確認され 14 ～ 15 世紀頃の中国製陶磁器等が出土したことから直接的、間接的に交流があったことがわかります。豊見城市発祥の地ともいわれ歴史と信仰に満ちた風光明媚（ふうこうめいび）な島だったようです。

⑱平敷屋朝敏顕彰碑・「仲風節」の歌碑
組踊「手水の縁」の歌碑

和文学者であり組踊「手水の縁」の作者として名高い平敷屋朝敏（1700 ～ 1734 年）が誕生して 300 年にあたる 2000 年 11 月 23 日に建立しました。平敷屋朝敏は組踊の創始者である玉城朝薫（1684 ～ 1734 年）と同時代に生き、劇作の影響を受けました。「仲風節」は平敷屋朝敏が瀬長島を理想郷として見立てて歌ったと伝えられています。組踊「手水の縁」は数ある組踊の中で唯一の恋愛物語であり、その舞台が瀬長島からはじまり、糸満市の波平玉川、知念山口（現在南城市知念山里）、知念浜となっており本島南部の海岸線を結ぶ線上に物語は展開します。

手水の縁

世間とよまれる
瀬長山見れば
花や咲き美さ
匂しほらしや

仲風節

語て呉れ
恋ひ渡ら
浮世鳥鳴かぬ
島のあらは

⑲子宝岩の歌碑

戦前、瀬長島の南西側に高さ数メートルの岩があったといわれます。その岩のことを地元では「イシイリー」といいました。岩の上部には上下に二つの穴が開いており、何時のころからか島の内外から人々がここを訪れ、「子宝に恵まれますように」と祈ったそうです。その時に「男の子」が欲しければ上の穴へ「女の子」が欲しければ下の穴へ小石を投げ願掛けをしたといわれ、その情景を歌った歌碑です。

上の穴いりば
いきがんぐわなすい
下の穴いりば
いなぐなすさ

豊見城市内のシーサー巡り

豊見城市内にはシーサーあるいはシーシメー、シーサーグゥーなどといわれる獅子像が 10 ヶ所でみられます。

設置の目的としては一般的には村落の外からくるさまざまな邪気を返すために据えられています。また、その災いをもたらすといわれる丘やガマ（洞窟）等に向けられて設置されています。

（1）真玉橋（まだんばし）のシーサー

真玉橋にはイリヌシーサー（西ヌ石獅子）、アガリヌシーサー（東ヌ石獅子）といわれる 2 体のシーサーがあります。イリヌシーサー（A）は村の守り神としてガーナー森に向けて置かれたといわれます。2005 年に国道 329 号那覇バイパス側に移動され西側に向いています。アガリヌシーサー（B）は那覇市国場のカラヤームイ（瓦屋森）の風難（ふうなん）を防ぐための守り神としておかれているといわれ、東側を向いています。

A イリヌシーサー

B アガリヌシーサー

（2）根差部（ねさぶ）のシーサー

真玉橋同様に村の守り神としてガーナー森に向けられているといわれます。サングゥチアシビ（三月遊び）で拝まれます。

（3）高安（たかやす）のシーシーメー・シーシウカミ

陶製の獅子像一体がガンヤーに向けられ据えられています。これは獅子に龕を睨ませ龕の霊を鎮めるという意味があり、死者を納めた龕のけがれに対する魔よけとされています。

（4）饒波（のは）のシーサーグヮー

琉球石灰岩と焼物のシーサーが据えられておりシーサーグヮーまたはムイグヮーといわれています。平良にあるアチャーヤーガマといわれる洞窟に対する返しとして据えたといわれます。

（5）平良（たいら）のムラシーサー

獅子に似た琉球石灰岩の自然石で特に加工はされていません。高安方面に向けて据えられています。旧暦８月 15 日にはシーサーヌユーエーといわれる村落祭祀（そんらくさいし）があり、フチャギと重箱を供え拝みます。

（6）高嶺（たかみね）のシーサー

イームヤーの小高い所にあり、武富（たけとみ）方面に向いています。旧暦８月 15 日に字の役員がシーサーにフチャギを供えて拝みます。

（7）渡嘉敷（とかしき）のシーサー

保栄茂グスクに向けられ、保栄茂グスクの岩が「渡嘉敷クワークワー（渡嘉敷を食おう）」としているので、その返しとして据えたという伝承と、村に火事が多かったのでその火難返しとして据えたといわれています。

（8）保栄茂（びーん）のシーサー

唐旅から持ち帰り、集落の前道に魔除け、火除けのために置いたという言い伝えがあります。

（9）名嘉地（なかち）のシーサー

かつて集落北側のシーシヌメーにありましたが、後に我那覇から名嘉地に至る道が主要な道路となったため、明治期にムラの常会で決めて現在地に移動させたといわれています。

（10）田頭（たがみ）のシーサー

集落内に２体のシーサーがあります。２体ともに頭部のみのシーサーで二、三百年ほど前に造られたといわれています。

Ａは南南西に向いて置かれ、その向きについては瀬長島のマジムン（妖怪）や、与根の珠数森へ向けられているといわれています。珠数森は昔からシジ高い所とされており、現在でもこの辺りで家を建てるときにはそこに正面を向けないようにしているということです。このシーサーは戦争中米軍の侵攻を阻んだという伝承もあります。

Ｂは現在は集落の西側に墓地群があるためそこに向かっているともいわれています。

Ａ

Ｂ